

話芸の源流と言われる節談説教を交えた布教大会がこのほど、石川県門前町広岡の真宗大谷派満覚寺であり、能登節談を交えた法話が続いた。大会には満堂の門信徒とともに、宗教民俗学関係者も席に連なり、信仰と風土が一体になっているかのような節談に関心を寄せた。

同寺の布教大会は毎年六月十一日に開かれており、ことしはちょうど二十回目当たる。会場の本堂にはお参りの人たちが詰め掛け、廊下にも座るほどの盛況ぶり。能登一円はじめ、富山や福井県、東京などから毎年のように来ている人も多いという。

同寺の広陵（ひろおか）兼純住職宝三は、古い歴史を持つ能登節談の伝承者の一人として名高い。請われて県内外の寺院などで布教することも

多く、この日は広陵さんに三人の僧職が、三十分ぐらいつつ法話をした。

浪曲、落語、講談などの話

信仰と風土が一体に

門前町で布教大会 能登節談に 根強い支持

芸はいずれも節談が源と言わ

れている。愛知県の一部や四国でも法話の中に取り入れられているが、門前町を訪れた民俗学者は、「現在では能登が最もきちんとした形で伝え



高座の僧職の法話に笑みが絶えない布教大会。ビデオの収録もあった
＝石川県門前町の満覚寺

られている地域でないかと思う」と話した。真宗の教えを

説いてゆく中で、時折、節や語りを交え、法話を盛り上げていく手法を取る。

このため、宗祖の教えはもとより、開法者に身近な話題を加えつつ展開されるのが一般で、笑いあり、涙あり、最

後はうなずかせる

との効果を持つこ

とも少なくない。

同日の布教大会に

集まった大半は、おにぎり持参で席を動かず、節談説教に対する根強い支持をうかがわせた。

広陵さんは「私自身、能登節談が好きなので続けていく。聴き手の心に、教えが響き合うという点で良いと思う」と言う。また、宗教民俗学に詳しい日本民俗学会員の西山郷史さん（珠洲市）と上越教育大助教授の真野俊和さんは「信仰と生活がしっかりと結び合っていることが、改めて確かめられた」と述べた。